

第13回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

雪晴れ壮快

天野 昭吾（山梨県大月市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

まさに題名にぴったりの情景である。この作品は第9回の入選作品と同じ撮影時と思われるが、前景の処理、中間の山、色調、富士山の大きさと位置、すべてに格段の差がある。前作は手前に雪面とブッシュがあり、中間にガスもなく、何となく雑然とした感じがあったが、本作ではそれらを見事に払拭して、富士山本来の持ち味である崇高な美を表現している。山岳、一般風景を問わず、表現は森羅万象をいかにバランスよく取り入れ、見る人すべてに感銘をあたえるものでなくてはならない。この作品はそれを余すところなく実現している。

推薦

晴山かつら 小林 博（山梨県大月市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

作者はときとして、難解な題を付けるが、いわんとする点はわかっても、もう少し別な表現にした方がよい。例えば「旭光いまだに上空に在り」的な方がわかりやすい。やや富士山が画面中心に位置しすぎている点が気になるが、静謐な感じを第一に考えるなら、これも捨てたものではない。だが、上空の雲が左方にのびているので、右手を少し切った方がよりすばらしくなるだろう。中景に大蔵高丸の山稜が水平に入ってしまう白谷ノ丸からの富士山をグンとアップにして下部を省略したことによって実に端麗な作画となった。いつも滋味ゆたかな氏の作風に好感を抱く。

推薦

静かに明ける

宮地 広之（東京都世田谷区）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

「静かに明ける」という題名は、あまりに普遍的でありすぎ、曲がない。いままさに日の出の光を受けて紅にかがやくこの神秘的な富士これぞ「霊峰いまぞ明け行く」とでもしたらさらに美しさが感じられるのではないか。山頂を画面右上部に置き、左方へ稜線を渡した手法もオーソドックスでケレン味がなく好意を持てる。露光値・発色も最適といえ、近年、出色の作といえよう。笹子雁ヶ腹摺山山頂ではなく、山頂の一角からであろうか、これまたみごとなポジションであった。小林博氏の作品と好一對の上作である。

特選

雲海上に聳ゆ

伊藤 茂（静岡県駿東郡）

百蔵山



白簾史朗氏講評

実によい雲が湧いたものだ。あの1,000メートルそこそこの百蔵山からでありながら、実際はもっとはるかに高い山から撮影したかに思える作品である。桂川の谷あいに入った雲が下界の市街地の俗っぽさを埋めて、まさしく人間がまだ住まなかった時代そのままの状況を作り出してくれた。だが、それを写しとり、表現する力が無ければ、いくら条件だけよくてもどうしようもない。通常の作画と逆に、光の当たった富士山を左上方に持って行き、右方と下方に雲を対照させて置いた。応募10点中、8点が大蔵高丸、2点が百蔵山、そしてその少ない方が入賞するのだから写真はおもしろい。

特選

色づく山並の彼方に 山本 まりよ（静岡県静岡市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

48点の雁ヶ腹摺山作品から唯2点の入賞、その1点がこれである。実に好条件下の富士山であり、雲の多かった平成17年の紅葉と富士山とが、実にマッチしている。光の多く当たった左方下部の山肌と右手上方の富士山とが定跡どおりの「いの字」構図となって安定した画面を作っている。左方からの光も山肌に影を刻んで画面を立体的とした。標準レンズの作画であるため、手前と奥との遠近感が強調されて、“十二単衣”といわれるこの山からの展望の特徴を如実にあらわしている。初応募での初入選、これに傲ることなく精進することを祈る。

特選

暗雲流れる 山崎 勝孝（神奈川県藤沢市） 高川山



白簾史朗氏講評

天候不安定中の日の出の時間帯。これまた1,000メートルばかりの高川山からの富士山とは見え難い高度感と迫力がある。美しいといわれる自然も、ただ美しいだけではなく、ときには汚くも凄くも見える。美の象徴といわれる富士山とて、それは同様である。要はそのとき、その場で、その条件に出会った作者の感じたものが、作者の感覚によって、どう表現されているかにある。欲をいえば、もう少しアップにしたら、さらに凄さが増したろうと思う。中間の雲、全体の調子、このときの作者の心境を聞いてみたい。

入賞

晩秋

内藤 元次（山梨県大月市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

作者の応募票には“雁の腹摺り山”と記してある。作者は地元の人でもあり、このコンテストを創始してより13年にもなるのに山名を間違えるなど考えられないことである。

作品は一見、美しく表現されていて、鮮明さもあるが、これはフォルティア（作者はこれもホルテアと記してある）の発色特質であり、正常の発色ではない。順位が下がったのはそのためもある。構図としてはほぼ満点といってよいが、何としても色調が不自然なのは残念であった。苦言お怒りなく、今後に益として頂きたい。

入賞

秋色づく 高津 秀俊（山梨県大月市） 姥子山



白簾史朗氏講評

初秋のさわやかな空気が感じられる好作であるが、全体的に少々ピントが甘いこと、手前の樹相が雑然としすぎているのが難である。構図的に見ても、富士山の山頂を右に置いて左稜線を長くのばす手法はよいが、画面右半分の調子が左半分にくらべて濃く重い。そこへもってきて、手前の樹林の右にもっとも太い樹幹を置いたことによって富士山と視覚的に重なり、重苦しい。ここはかえってこの木の幹がなく、色づいた葉むらだけの方がずっとすっきりしたと思う。それにPLフィルターを使わなかったならば、富士山のさわやかさも増したろうと考える。

入賞

錦秋

高橋 利延（神奈川県相模原市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簞史朗氏講評

「錦秋」という語はない。これは「錦繡」というのが正しい。それに撮影場所を「牛奥ノ雁が腹から・・・」としてあるが、これまた不正確である。こうしたことは募集要項をしっかりと読んでいないか、気のゆるんでいるせいだといわれても仕方がない。作品的には撮りにくい無雪期（一昨年は雪が遅かった）のものだが、色調はよくととのっている。しかし、富士山の入れこみに気を使いすぎて、左方の山頂の入れこみが不十分だった。富士山の右裾を少し切り、その分左方にのばせば、しっかりとした構成となる。惜しいところである。

入賞

雲上富士 八巻 長子（山梨県中巨摩郡） 小金沢山



白簾史朗氏講評

力強い作品である。こうした場合、ふつうは山頂をもっと右に置いて、左方へ山裾をのぼすものだが、ここでは逆に山頂を左に置いて右山裾を長くとっている。やはり無雪期の作品であるが、富士山の青、雲のピンクと単純化したテーマを、下部の黒い樹林でがっちりと締めて安定を図っている。全体の配分がよく、単純化された画面にさらに力を副えている。この作品は小金沢山での、ただ1点応募の作品であるが、作品が無いから致し方なく入賞させたものではなく、実力で克ちとったものであり、作者の実力を買う。

入賞

巖冬の朝 佐藤 知津夫（山梨県大月市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

本来、白谷ノ丸は1～3番の各山頂から離れていて、正式には十二景中に認められていない。この山は大蔵高丸と牛奥ノ雁ヶ腹摺山の間にあるため、かつていくつかの応募があって、それがそのまま踏襲されてしまったものである。今回は十二景に加えられたが、いずれ整理されるべきの場所なのである。この作品は従来の白谷ノ丸の作品と若干切り口が異なり、雪面の美しさの描写にすぐれていたことから取り上げられた。朝の色づいた斜光が、雪面の雪粒のひとつひとつを細密に描写し、その上に富士山が載る。全体の調子のバランスもよく、作家の開眼が感じられる作品である。

入賞

雲の舞 筒井 章（静岡県伊東市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

フォルティアらしくない発色といえ、そのことが入賞につながった。上空にひろがる巻積雲（いわし雲・うろこ雲）をワイドレンズを利用して大きく広く入れ込み、下部に富士山を小さく配した。手慣れた手法であり、作品としてはよく見かけるモチーフであるが、入れ込み、構成は抜群であり、美しい作品に仕上げられている。ただ、モチーフがモチーフだけに印象が弱く、そのため中位に止どまってしまった。これが爽秋の候の作品であったら、そして富士山に新雪が冠されていたとしたら、ぐんと上位に置かれる作品である。

入賞

破魔射場より夏だより

権正 光夫（山梨県富士吉田市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

「〇〇より夏だより」はあまりいただけない。トウゴクミツバツツジの開花は6月上旬、初夏の候である。それに撮影場所を応募票に破魔射場丸と記してあるのも不注意である。はるか以前より丸は廃止されている。たとえ国土地理院図にそう記されてあっても、間違いであり、大月市の募集要項を最優先しなければならない。それに使用フィルムであるが、富士フロンティSPとはどんなフィルムか判然としない。発色から判ずるとフォルティアではないかと思われるが、こうした不明確なデータ記入は、本来作品を云々する前に落選なのである。カメラはアサペン67、レンズもタクマといいかげんそのものである。今後は十分注意してほしい。

入賞

上空染まる 八巻 長子（山梨県中巨摩郡） 滝子山

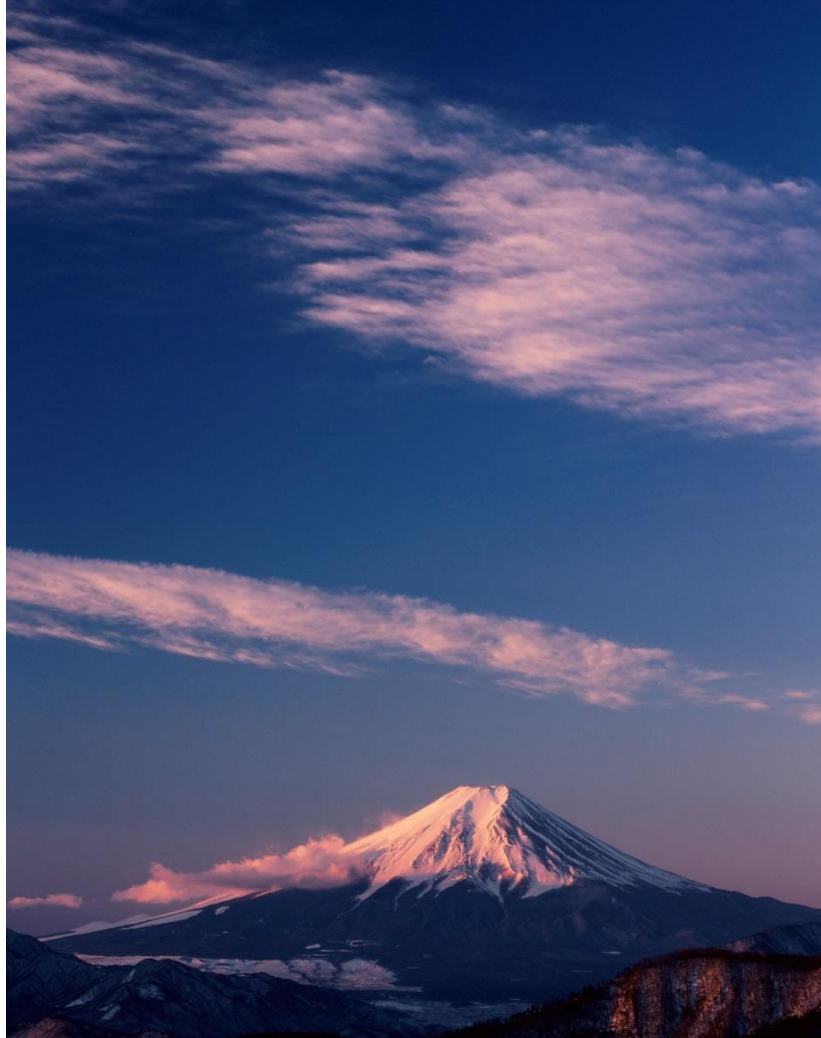


白簀史朗氏講評

美しい調子の作品である。朝の光に染まった雲を水平に流し撮りした点がよく生きている。この題名もできたら「上空朝雲走る」というようなものの方が、より感じが出る。それにシャッタースピードが2秒と記されているが、この富士山の大きさから考えられる焦点距離のレンズでは2秒でこのように大きく流れないと思うが、どうだろうか。この作品も応募数の少なかった滝子山のものだが、他に応募したのは帯金晃氏、高橋利延氏、愛澤和弘氏の3名で、その中では断然八巻氏の作品がすぐれていた。

入賞

富士行く朝雲 三浦 義朗（埼玉県入間郡） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

八巻氏の作品とまことに対照的な、しかし同手法のものである。八巻氏の方が雲を流しての横位置、三浦氏の方は朝焼けの富士に配する、おなじく色付いた朝雲を静止させたものを縦位置にまとめた。八巻氏の微妙な色相に対して、三浦氏の方ははっきりとコントラストでの勝負となった。だが、どうしても横位置作品での横の雲の線である八巻氏に一足の長があり、縦位置に横の雲の線である三浦氏の方が一歩およばなかった。それと題名も一考を要する。「富士行く朝雲」では感じがつかめない。せめて「富士上空を彩る朝雲」と忠実に描写した方が強い。

入賞

雲海の富士 大戸 康世（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

地味ではあるが、構成はしっかりしたものがある。以前のように富士山の上方を不必要に多く空けるような作者はいなくなった。この作品もぐっと天を詰めての富士山で、そのため、富士山の高さが一段ときわ立って見える。こうした点は視覚的に重要なもので、山岳写真、ことに富士山にとっては絶対に必要な構図といえる。ただ、この作品で残念なことは下部の雲海が平板であり、ことに左方にのびている点が富士山に対して支え的なものがないため、力が抜けた感じとなっている。ここで少し雲が盛り上がるかすると救われたと考える。

入賞

新緑

石川 厚志（山梨県大月市）

百蔵山



白簾史朗氏講評

いかにも初夏にふさわしい晴れ上がった青空。かがやく残雪。好条件に恵まれての佳作ともいえるが、そこには作者の表現に対する確固とした信念がなければならぬ。富士山と手前の新緑との大小のバランスもよく、さわやかさも無類であるが、惜しむらくは新緑の色が少し濃すぎて、いま一步明るさが足りない。これがもう少し明るかったら、と惜しまれてならない。百蔵山の作品はいままでなかなかよい作品がなかっただけにその思いひとしおである。しかし、それは今後の作者の奮起を期待した方がよいだろう。

入賞

雲間に輝く 山崎 哲男（山梨県上野原市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

なかなか考えた切り方であり、大月の市街をうまくかくしたところなど感心する。「雲間に輝く」という題名はまあ良いと思うが、それをさらに強調するには、もっと画調の濃度を上げなければならない。つまり色を濃くして上空の雲、そして富士山の雪ももっと調子を出したい。そうしても富士山の雪の輝きは失せるどころか、上空の雲が暗くなることによって、より白さを増して見えるものだ。それと、右手の高川山が中途半端となっている。これを尾根の平坦になったあたりで切って左へのばし構成し直すことが必要だった。

入賞

焼雲流れて 天野 昭吾（山梨県大月市） 高畑山



白簾史朗氏講評

思い切った長焦点レンズでの引き寄せであるが、惜しむらくは若干ピントが甘い。色調を少し濃くしたら、少しは救えると思うが、やはりピントは撮影時に細心の注意を必要とする。それに題名はこれもあまり適当でなく、焼雲などという不明確な形容をせず、夕焼けとか朝焼けを頭に付ける方がよい。それにこの作品は雲が流れていない。ほとんどとどまっているので、その点もかかるといったことばの方がよい。全体の印象としてはなかなかすぐれた点もあるが、空が少し空きすぎてしまった。ほんの少し詰めるだけでまったく異なった印象となろう。

入賞

厳冬富士の朝焼け

松本 邦弘（埼玉県入間市）

倉岳山



白簾史朗氏講評

これまた思い切った引き寄せであり、そのことが成功の因となっている。富士山の山体を大きく拡大したことで、左右の稜線の伸びがあまり構図上関係なくなり、そのため、画面中央近くに山頂を位置させても、あまり違和感がない。それにこの山は、まだ山頂からの展望に樹林がじゃまになることがあるので、こうした手法も効果的となる。手前の雪の付いた山々の沈みが富士山の赤熱と美しい対照を形成して、目の覚めるような鮮明さがある。この作者は多くの応募者が便利な山頂ばかり狙うのに反し、不便な山頂をいつも選ぶ。ひとり腕を磨く有利さがつねに生きているとあってよい。

入賞

厳寒に赤焼ける朝 北沢 清行（長野県松本市） 九鬼山



白簾史朗氏講評

題名が少々くどい感じがするが、本人のいわんとするところは見る人によく伝わる。この山も山頂に植林木があつて、少し離れた場所でなければ撮影できない。そうした苦勞を敢て味わつての入賞は値打ちがある。ただ、百蔵山や扇山、岩殿山などちがつて、人里がかくれるので、その点有利といえる。松本邦弘氏の倉岳山と5日おくれの冬、時間帯はこちらの方が若干早い。そのため色調の強さはないが、灼赫と焼けるといった感じでなく、静かな夜明けの味がある。そのため題名が少々くどくなっている。左上方に山頂を置いたことも成功の因である。

入賞

雲流れる朝に 高橋 英子（東京都大田区） 高川山



白簾史朗氏講評

3人だけしか入賞（作品は4点）しなかった女性中のひとり。この十二景コンテストでは特選②の山本まりよ氏同様、初応募の初入選である。応募3回ながら初入選である山崎勝孝氏とおなじく高川山の作品であるが、その上、同月同日の撮影である。時間帯はこちらの方が早く、そのため赤く焼けているが、ほんの少し、色相が弱いため入賞に甘んじた。もう少し調子が引き締まっていたら、この順位は逆転したかも知れない。構成的には実にしっかりとしていてまことに惜しいと思わせる作品であった。

入賞

朝光 帯金 晃（静岡県沼津市） 本社ヶ丸



白簀史朗氏講評

十二景18の山頂中、12山と最多の応募であったが、残念ながらこの1点にとどまった。審査にあたっては第三予選までは帯金氏の作品が数点残っていたが、やはり最終的にはいま一步ということで、他におくれをとった。

この作品は本社ヶ丸山頂近くの露岩を前景とした構成で、右上部にうっすらとかすむ富士山がある。左中景の山は三ヶ峠山であり、バランス的にはある程度役立っているが、何といても林立するアンテナがムードを壊してしまっている。この三ヶ峠山をうまく省略できたらと選者は思うのだが・・・。

入賞

煌めきてあり

小谷 哲朗（三重県松阪市）

清八山



白簀史朗氏講評

作者は応募すでに7回、そのうち5回の入選を果たし、そのうちの1回は推薦である。今回また8回目の応募、入選は6回となった。格調高いがっちりとした作風は、いかにも富士山といった感じを見る人にあたえる。いわゆる正統派作家としての確立がある。今回の作品もさして好条件といえない朝の一瞬をみごとに捉えているが、題名どおり、富士山頂につづく雪面の煌めきがテーマであり、これでもう少しアップになっていたら、と惜しまれるところ大である。こうした作家は応募票への記入も完璧で、他は模範とすべきであろう。

総評

審査員長 白籬史朗

一年が経過するのはまことに速く年号も2006年となり、このコンテストも第13回をむかえた。厳しい社会情勢やデジタル写真の発明、普及によって、写真本来の道である銀塩による描写が軽んじられる風潮が顕著となってきた。しかし、何といたってもデジタルによる内容、発色、クオリティーはいまだ到底銀塩フィルムによる内容の高さにおよばず、したがってこのコンテストもあえて「デジタル不可」を記さなくとも、それらのものの混入はない。

本年度の応募状況を見ると、応募総数322点、これは昨年度の第12回と比較して36点の増加であり、初回から今回まででもっとも多い。だが、応募者数は67名で、昨年より5名減である。内容で見ると市内応募者が15名で応募点数82点。応募者数は2名増加であるが、県内応募者数が3名、県外応募者数が4名減で差引き5名減という計算になる。だが、県外からの応募数199点が昨年より35点多く、それがものをいって応募総数322点となったわけだ。

山頂での応募で見ると、1番山頂の雁ヶ腹摺山と姥子山が48点と5点、2番山頂の牛奥ノ雁ヶ腹摺山と小金沢山が5点と1点、3番山頂の大蔵高丸とハマイバが、何と73点と21点の多きとなり、その分、他の山頂からの作品が薄くなったことはいなめない。

4番山頂の滝子山と笹子雁ヶ腹摺山が4点と5点、5番山頂の奈良倉山が30点、6番山頂の扇山が18点、7番山頂の百蔵山が28点、8番山頂の岩殿山が25点、このあたりはまあまあであったが、他に10点を超えたのは11番山頂の高川山の23点のみで、残りの9番山頂の高畑山と倉岳山は4点と7点、10番山頂の九鬼山は9点、12番山頂の本社ヶ丸と清八山は6点と8点であり、他にどこにも属さないものが2点あった。

この各山頂作品の数を昨年度と比較してみると、1番山頂が46点と6点、2番山頂が22点と4点、3番山頂は本年同様61点に9点と多い。そして。やはり10点を超えた山頂は5番山頂の奈良倉山37点、7番山頂の百蔵山25点、8番山頂の岩殿山22点、6番山頂の扇山15点の4山のみで、あとは高川山の9点が最高で、滝子山2点、笹子雁ヶ腹摺山3点、高畑山8点、倉岳山5点、九鬼山2点、本社ヶ丸2点、清八山5点という状態だった。こうした片寄った応募は審査や入・落選に大きく影響するのは必須のことで、応募者本人にも大きなマイナスとなる。山頂に到達するのに便利なところ、とばかりに考えていると、いつまでたっても入選は果たせないことにもなることを、各自よく考えてほしい。

また、このコンテストに初回からこの第13回まで応募されている作者は3

名、初回をのぞいた12回が1名、第9回と第12回をのぞく11回が1名、第4回からの10回が2名、ほかに9回が3名、8回が3名、7回が3名、6回が7名、5回が3名と多くの作者が多数応募されているが、初めての応募という方も21名いる。

また、さらに、今回はすべて異なる山頂からの応募は帯金晃氏と宮地広之氏の12山、次いで高津秀俊氏と八巻長子氏の11山、3番目は三浦義朗氏、大戸康世氏他1名が8山、次いで天野昭吾氏他1名の7山がこれに次ぐ。この甲斐あって天野氏は初の最優秀賞と入選、宮地氏は推薦2、帯金氏、高津氏、大戸氏と三浦氏は入選にとどまったが、八巻氏は入選2点となった。

応募2山のみ的小林博氏は地力を発揮しての推薦1、2山ながら固めて出品した伊藤茂氏、初応募、初特選1の山本まりよ氏、3回目の応募で初特選3の山崎勝孝氏、その他順当に入選を果たしたといえる。ここでいいたいのは、同山域で数点の作品を応募したら必ずしも入選するとは限らないことで、やはり広く山に登り、多くのチャンスを生かした作者に栄冠が輝くのである。そのもっとも顕著な例が八巻氏の小金沢山で、この山頂は氏の作品ただ1点のみであったし、4点の高畑山また然り、滝子山も同様である。同山頂で同様の作品が多く集まるので、そこから上位の作品が選ばれた場合のみ、2度のチャンスがあるが、これまた多くの競争相手があることを覚悟しなければならない。

本年度は市内応募者15名の作品82点から、最優秀賞をはじめ、推薦の1、入賞が6点出た。そうした地元作家の向上はまことに喜ばしい。これは地元の熱意に愛郷心がプラスされたものと考えたい。一面、地元はもっとも有利な立場にありながら、その有利点を生かしていない人も多い。これは怠慢、高慢というほかはない。おおいに心すべきであろう。事実、東京、神奈川、静岡、千葉、埼玉、長野、岐阜、大阪、三重から遠路をおして撮影する人も多く、山梨県内からでも多数の応募があることを心に銘ずるべきであろう。

さらに撮影時、PLフィルターを使用しなくとも良い場合にも装着する濫用も多く、ズームレンズを使用している作家は、11人いたが、誰ひとりとして、〇〇ミリ相当と使用焦点距離を記入している作家はいなかったことも、今後心すべきことであろう。

なお、毎回のことであるが、入選の1～18は作品の順位でなく、十二景山頂の番号の順であるので、ご承知を願う。